

名作再読、拾い読み (33)

『善人はなかなかいない』 (“A good man is hard to find”)

小澤文彦

フラナリー・オコナー (Flannery O'Conner, 1925-1964)はアメリカ南部ジョージア州サヴァンナで生まれました。不動産業を営んでいた父親の都合で一家は一時アトランタに住みましたが、父親が膠原病の一種であるエリテマトーデス(紅斑性狼瘡)に罹って仕事を続けることができなくなったので、母方の実家のあるミレッジビルに移りました。オコナーはこの地のピーボディ高校を卒業後、ジョージア州立女子大学に入学して大学の季刊文芸誌に詩や短編小説など数多くの作品を発表します。大学卒業後はアイオワ州立大学のジャーナリズム学科創作科に入学し、ポール・エンゲルに師事して小説の執筆を始めました。ニューヨーク州サラトガ・スプリングズへ移って出版社との契約を結びますが、24歳の時に父親と同じエリテマトーデスが発症し、その後はジョージア州に戻って治療しながら創作を続けました。『賢い血』が1951年末に完成して翌年出版となり、1954年には短編集『善人はなかなかいない』が出版されました。その後も、病氣と闘いながら作品を書き続けましたが、39歳で生涯を閉じました。

今回は、『善人はなかなかいない』を紹介します。殺人事件を扱った内容ですが、コミカルな味わいを含んだスリルのある短編小説です。

アトランタに住んでいるベイリーは妻と幼い子供3人を連れてフロリダへドライブに出掛けることにしました。おばあちゃんは、東テネシーの親戚を訪ねたかったので、「ミスフィット(はみ出しもの)」という仇名の犯罪者が脱獄してフロリダへ向かったというニュースを新聞で読み、フロリダ行きに反対して行き先を変更させました。息子夫婦は普段着に近い服装なのに、おばあちゃんは何か事故にでもあったら自分がレディーとして扱われるようにと、花飾りのついた麦わら帽子をかぶり、襟と袖口にはレース飾りの付いたお洒落なドレスを着て車に乗り込みます。三日も家をあけるので、ペットの猫を籠の中に隠してこっそりと持ち込みました。途中にあるサンドイッチの店に立ち寄って、店主と世間話をし、「善人はなかなかいない」と言う点で意見が一致します。

暑い午後の日差しの中を出発し、おばあちゃんは暫くうたた寝をして目を覚ました時、以前に訪ねたことのある大農園屋敷が近くにあることを思い出し、ベイリーの反対を押し切ってその屋敷へ向かわせます。舗装なしの道を進んでいくうちに、おばあちゃんはその屋敷がジョージア州ではなくてテネシー州にあったという記憶違いに気付いてぎょっとし、その瞬間に手提げ鞆をひっくり返します。その途端、籠の中に入っていた猫が運転席のベイリーの肩に飛び乗り、ベイリーは驚いて運転を誤り、車は一回転して谷底に落ちました。少し離れた丘の上に車が見えたので、手を振って助けを求めます。車から降りてきた3人の男たちは脱獄囚でした。ベイリーはそれに気が付いて皆に注意しようとした矢先、おばあちゃんは主犯の顔を見て「ミスフィット」と叫んでしまいます。彼は、気が付かない方が一家の身のためだったのにと答え、仲間の二人には家族を森の中へ連れて行かせ、拳銃で殺させます。最後に残ったおばあちゃんに、彼は自分の仇名の由来や罪と罰のアンバランスなどを語るのですが、おばあちゃんはクリスチャンとして憐れみの気持ちから彼に手を差し伸べます。その手が肩に触れた瞬間、彼は思わずおばあちゃんを銃で撃ってしまいました。

ストーリーは小気味よいテンポで展開していき、家族全員が一人残らず殺されるという悲惨な出来事でありながら、おばあちゃんの茶目っ気のある言動に皮肉とユーモアが感じられ、ほとんど暗さを感じさせません。善人と悪人の境界線は何かを考えさせる興味深い小説です。

参考文献

1. Flannery O'Connor "A good man is hard to find" in "The complete works of Flannery O'Connor II" (Rinsen Book, 1992)
2. フラナリー・オコナー著、横山貞子訳『善人はなかなかいない』(『フラナリー・オコナー全短篇』[上]より)(筑摩書房、2003)

おざわ ふみひこ (情報サービス課)